

二〇一六年度 入学試験問題

文学部A方式I日程・経営学部A方式I日程・人間環境学部A方式・

GIS(グローバル教養学部)A方式

二限 国 語 (60分)

〈注意事項〉

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 志望学部・学科によって解答する問題が決まっている。問題に指示されている通りに解答すること。指定されていない問題を解答した場合、採点の対象としないので注意すること。
- 四 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

マークシート解答方法についての注意

マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読みとって採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。

(一) 正しいマークの例



(二) 悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

- 二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。
- 三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。
- 四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔二〕 つぎの各問いに答えよ。

問一 つぎの文中の傍線部A～Dのカタカナを漢字に直して解答欄に記せ。

昨晚、友人と新進キエ^Aのシェフが腕を振るうレストランに行った。私はすばらしい料理にすっかり^Bミリヨウされたが、友人は壁に掛かっていた貴婦人のシヨウゾウ^C画にトウスイ^Dしていた。

問二 〔I〕のA～Dの空欄と同じ一字の漢字が入るものを〔II〕のA～Eからそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

〔I〕 A 新商品の売り上げを□算用する。

B 逃げた男かどうか□実検してもらいたい。

C 部長は会議で長広□を振るうことで有名だ。

D □学問で得たことでも、役立つ時がある。

〔II〕 A 彼女は上司を□鋒鋭く追及した。

I 兄の行動は、世間の□目を集めた。

U 友人と□襟を開いて話し合った。

E 問題解決のため、鳩□会議を繰り返した。

(二) つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

国木田独歩に『武蔵野』という作品があります。独歩は一時期、武蔵野のはずれに住んだことがあります。この作品はその武蔵野の風景のなかにじぶんが入りこんで散歩したり、またその自然を見たり、観察したりしたことを描いているだけのものです。なかなかいい文体の作品です。いまの言葉でいうと一種のノンフィクションの小説といってよいくらい、文学的な香りの高い文章なのです。観察もたいへんすぐれています。

明治の末年に「武蔵野趣味」というのがありまして、その先駆的な作品になったのが、独歩のこの『武蔵野』でした。武蔵野趣味とは何かといいますと、風景というものの観察あるいはそれとのかかわり方を、個性ある人間と個性ある風景とのかかわりとしてとらえる、そういう見方といってよいかとおもいます。風景に個性があるというところがおかしいのですが、風景に個性がある、近代的自我をもった人間のように武蔵野の風景を描くというところがいちばん根本的な特徴です。独歩の『武蔵野』は、^①風景というものが個性として存在しうるものだとすることを、はじめて描ききった作品だといえます。ですから、明治の文学にたいして大きな影響を与えました。

* ポリネシア地域からヤポネシアに渡ってきて分佈した人種を旧日本人というとするれば、その旧日本人の考え方の特徴は何かといいますと（これはポリネシアンの特徴でもあります）、風景は全部人間だというようにかんがえていることです。『古事記』や『日本書紀』あるいは初期の神話を見ますとこのことがよくわかるのです。たとえばそこに滝が落ちているとしますと、これは湍津姫だ（たきつひめ）というふうにすぐに人間化してしまうわけです。あるいは四国に阿波（あわ）という国があるとすれば、それは大宜津比売（おおいけつひめ）だというように **A** 化するわけです。四国の阿波に大宜津比売という神話上の人物が住んでいたということではなく、阿波イコール大宜津比売なのです。水があれば、それはミナワ姫です。岩があればそれが人間のおもえる。草木があれば、それが人間のように何か言葉語りかけているようにおもえる。風の音も滝の響きも人間の声のように聞こえる。土地ももちろん **A** 化してしまふ。そういうのがポリネシアン、つまり旧日本人の考え方の特徴なのです。これは北方の

アイヌなども大きな枠組でいえばオーストロネシアンといつてやはりポリネシアン系の人々ですから、同じような考え方の特徴をもっています。

そういう点からいいますと、国木田独歩の『武蔵野』はまったくそれを裏返した（裏返すことができた）わけです。裏返して、西欧近代的な風景の見方というのをはじめて確立したのです。つまり、旧日本人のなところからひきずっている伝統からいいますと、^②日本人的な風景にたいする感性をひっくり返してみせた最初の文章なのです。これはじつに画期的なことで、日本の近代文学史上のこの作品の大きな意味もそこにあります。

どうして独歩はこういうことができたかといいますが、それはもちろん独歩の並はずれた B 意識に由来するとおもいますが、もつと個人的な事情がありました。その頃、独歩は佐々城信子との恋愛に破れて、それでも信子に執着してしつこく追いかけてまわすのですが、あまりしつこくするので信子に拒絶されて、というような深刻な状態におちっていました。それでやり切れなくて、自然のなかを一人で漫然とさまよい歩くことを始めます。ハイキングに行くのではなく、自然のなかを漫然と歩くのです。つまり散歩です。散歩ということを独歩はおぼえたのです。それはもちろんやむをえずおぼえたわけですが、とにかく独歩ははじめて散歩ということをやったのです。

それまでの日本人の風景との接し方は、まわりは全部田畑であったり、林であったり、川であったりしましたから、日常無理に接しようとしなくなつて、もう何も意識しなくても自然な形で接していたわけです。そうでなければ紀行（いまでいえばハイキング）や旅に出るといふ形で、旅のなかで自然のなかを歩き自然を観察するといふふうな接し方をしていたので。

それにたいして、散歩というのは無目的に自然のなかをふらつくといふことです。もちろん当人は心のなかに悩みとか喜びとかさまざまな思いをたくさんたくわえて歩いているのですが、外から見るとそれはわからない。だから「あいつはなんであそこをフラフラ歩いているんだ」といふことにもなつてきます。

皆さんはそれこそ平気で散歩をしているでしょうが、明治時代の人は、散歩などするのはおかしなやつじゃないかというよ

せんが、ちゃんとはしなかつたのです。つまり、散歩の無目的さ、非有効性というのは

B

意識の産物なのです。その散歩を、独歩はじめて知ったのです。

この散歩を彼はどこから知ったかということになりますが、『武蔵野』という作品にはツルゲーネフの『あひつき』の冒頭の部分が引用されています。主人公が林のなかをさまよい歩いていると、あいびきのために待っている少女がいて、あいびきが始まって、というような筋立てなのですが、そこに林の自然描写があつて、そのなかに主人公がボサツと座りこんであたりを眺めているというような記述があります。当時、二葉亭四迷が訳したものが出ていたのですが、独歩はそれを読んで、その影響を受けて『武蔵野』を書いたというふうに言っています。

その影響というのは、もちろん文章の影響というものもありますが、それと同時に散歩というものを初めて知るきっかけになつたということでもあります。無目的に自然のなかをさまよい歩く、しかし心のなかには悩みや鬱屈（もろろん）楽しさでもいいのですが、がいっぱいわだかまつていて、というそういう暇のもち方、そういうことを日本人は明治以降になつてはじめて獲得したのです。それを文学としてはじめてなしとげたのが独歩の『武蔵野』だったわけです。

『武蔵野』には次のような描写があります。「朝まだき霧の晴れ間に家を出て野を歩み、林を訪う」「午後、林を訪う」「林の奥に座して傾聴し、停止し、黙想す」つまり、林の奥に座つてあたりを見まわしたり、風の音を聞いたり、考え込んだりしたというのですが、この文章はツルゲーネフの『あひつき』に出てくるもので、それをそっくり取っています。「夕暮れにひとり風吹く野に立てば」というのもありますし、また夜については「月を踏んで散歩する。晴烟を払い、月光林に砕く」というくだりもあります。晴烟シゲトというのは霧もものことです。こういうことはかつて日本人はやったことがなかつたのです。用事があつて夜に林のなかに入つていったということはあつたでしょうが、何の目的もなく月の出た夜に霧のかかっている林のなかを歩くというようなことは、近代以前の日本人はやったことがないのです。夜更けについては、「夜更けぬ。風死し、林黙す。雪しきりに降る。ああ、武蔵野沈黙す」という日記のなかの文章があります。③ こういう散歩の仕方というのは独歩がはじめてやり、そしてはじめて文章化したというふうことができます。

独歩の「抒情詩」仲間であった田山花袋は旅行好きな人でしたから、花袋はよく独歩や柳田國男を引っぱっているところ
に旅行しています。しかしそれはいわば旅人Ⅱ紀行家として旅行しているわけで、散歩というのを初めて文学に定着したのは
独歩の『武蔵野』だったのです。

(吉本隆明『日本的なものとはなにか』より)

【注】 *ポリネシア

オセアニアの地理的区分の一つ。ヤポネシアは、日本列島を太平洋の島々との文化的なつながりの
視点でとらえた造語。

*大宜津比売

食物(穀物)を司る神。国名「阿波」の語源は「粟」に通じるとされる。

*ミナワ姫

ミナワは「水の泡」の意。

*ツルゲーネフ

十九世紀ロシアの文学者。

問一 空欄

A

B

にあてはまる最も適切なことばをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

A ア 相對

イ 擬人

ウ 單純

エ 概念

オ 伝説

B ア 文学

イ 叙景

ウ 啓蒙

エ 歴史

オ 近代

問二 波線部C「わだかまって」とあるが、つぎの中から、「わだかまる」と同様の心情を表す時に用いる慣用的な表現を一つ選

び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 薄紙を剥がす

イ 粟が立つ

ウ 臍を噛む

エ 澱が溜る

オ 芋を洗う

問三 傍線部①「風景というものが個性として存在しうるものだということ」とはどういうことか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 風景は、人間と一体感をもって捉えられる自然の眺めではなく、客観的に認識されるべき自然現象の集合体の眺めであるということ。

イ 普通の小説のように人間関係を描かず、個人の心象風景として自然を描写するだけでも、すぐれた近代文学の作品になり得るということ。

ウ 別の土地に似たような眺めがあったとしても、風景にはそこに住む人々が培ってきた集団的な暮らしぶりの特色が反映されるということ。

エ 西欧近代的な自然観で眺めてみれば、旅行で訪れる名所・旧跡の風景でなくても、身近にもかけがえのない自然美を数多く見出せるということ。

オ 眺める個人のその時の内面のあり方や、向き合う自然の刻々の変化によって、たった一つしか存在しない眺めが現れるということ。

問四 傍線部②「日本人的な風景にたいする感性」とあるが、これはどのような感性といえるか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 土地の自然物や自然現象を、すべて人間が感受して心に結ぶ「心象」として受けとめる感性。

イ 土地ごとにそこを支配する神が宿っており、その神は特定の人間に乗り移るとみる感性。

ウ その土地の自然物や自然現象を、人間のように見なして自分達の様態と同じようにとらえる感性。

エ 自然物や自然現象はすべて人間に似た個性をもつという、近代文学の比喩にも通じる感性。

オ 自然も人間もそれぞれ対等の個性をもち、上下はなく互いに融和的な関係にあるとみる感性。

問五 傍線部③「こういう散歩の仕方というのは独歩がはじめてやり、そしてはじめて文章化した」とあるが、これについてつぎの(1)(2)の問いに答えよ。

(1) 独歩はなぜ、どのように「散歩」をおぼえ、それを文章化したのか。その説明として適切なものをつぎの中から二つを選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア ツルゲーネフの作品を知った影響で、深刻な失恋の心の傷を癒すためには、近所の自然の中を歩きまわるという行為が最適だと気付いたから。

イ 深刻な失恋のやり切れなさと、ツルゲーネフの作品との出会いを契機に、近所の自然の中をさまよい歩くということが習慣化したから。

ウ ツルゲーネフの作品に刺激され、失恋の相手との関係を自然のなかで取り戻すことを夢想しながら近所を歩くことが、いつしか日課になったから。

エ ツルゲーネフの作品の、日常の身近な風景描写に触発され、それに倣って近所の武蔵野を素材にして自らも実践してみようと思ったから。

オ 一緒によく旅行した親友の文学者の抒情詩と、ツルゲーネフの作品の暗示により、紀行文の自然観察の伝統を日常でも活かせると悟ったから。

(2) 筆者が考える独歩の「散歩」とは、どのような行為であると説明できるか。三十五字以上四十五字以内でまとめ、解答欄に記せ(句読点や記号も一字と数える)。なお、本文の抜き出し同然の記述は避けること。

問六 国木田独歩や田山花袋は文学史上で「自然主義」と呼ばれる文学の潮流を形づくったとされるが、つぎの中から、花袋の『蒲団』とともに日本の自然主義文学を確立したと評価される作品とその作者を示したものととして正しいものを一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 『破戒』・島崎藤村 イ 『草枕』・夏目漱石 ウ 『舞姫』・森鷗外
エ 『刺青』・谷崎潤一郎 オ 『金色夜叉』・尾崎紅葉

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

今は昔、長能^{ながたう}、道済^{ぢうさい}といふ歌詠みども、いみじう挑み交はして詠みけり。長能は、蜻蛉^{せうとう}の日記したる人の兄人^{せうと}、伝はりたる歌詠み、道済、信明^{しんめい}といひし歌詠みの孫にて、いみじく挑み交はしたるに、鷹狩^{たかご}の歌を、二人詠みけるに、長能、あられ降る交野^{かたの}の御野^{みの}の狩衣^{かりころも}ぬれぬ宿かす人しなれば

道済、

ぬれぬれもなほ狩りゆかむはしたかの上毛^{うはげ}の雪をうち払ひつつ

と詠みて、おのおの「我がまさりたり」と論じつつ、四条大納言の許へ二人参りて、判ぜさせ奉るに、大納言のたまふ、「ともによきにとりて、あられば、宿借るばかりは、いかで濡れむぞ。ここもとぞ劣りたる。歌柄はよし。道済がは、さ言はれたり。末の世にも集などにも入りなむ」とありければ、道済、舞ひ奏でて出でぬ。長能、物思ひ姿にて、出でにけり。さきさき何事も、長能は上手^{うはて}を打ちけるに、この度は本意^{ほんい}なかりけりとぞ。

春を惜しみて、三月小なりけるに、長能、

心憂き年にもあるかな二十日あまり九日といふに春の暮れぬる

と詠み上げるを、例の大納言、「春は二十九日のみあるか」とのたまひけるを聞きて、ゆゆしき過ちと思ひて、物も申さず、音もせで出でにけり。さて、そのころより、例ならで重きよし聞き給ひて、大納言、とぶらひにつかはしたりける返り事に、「春は二十九日あるか」と候ひしを、あさましき僻事^{ひがこと}をもして候ひけるかなと、心憂く嘆かしく候ひしより、かかる病になりて候ふ也」と申して、ほどなく失せにけり。「さばかり心に入りたりしことを、よしなく言ひて」と、後まで大納言はいみじく嘆き給ひけり。あはれにすぎずきしかりけることどもかな。

〔古本説話集〕より〕

【注】

*長能 藤原長能。平安時代の歌人。

*道濟 源道濟。平安時代の歌人。

*鷹狩 鷹と犬を用いて、鳥を捕る狩。

*はしたか 狩に使う鷹。

*四条大納言 藤原公任。平安時代の歌人で、この時代を代表する学才の持ち主であった。

*三月小 陰暦で二十九日ある月を「小」、三十日ある月を「大」という。

問一 二重傍線部A「させ」B「なむ」について、文法的用法が同じものをつぎの中からそれぞれ一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

A 「させ」

ア かえり入らせ給はむ事はあるまじくおぼして、しか申させたまひけるとぞ。

イ この帝、貞観九年丁亥五月五日、生まれさせたまふ。

ウ この宮に御覽せさせむとて、『三五絵』は作れるなり。

エ 「小さきはあへなむ」と、おほやけも許させたまひしぞかし。

オ 王威の限りなくおはしますによりて、理非を示させたまへるなり。

B 「なむ」

ア よそ人にてまじらひたまはむ、見ぐるしかりなむ。

イ その薬食ひたる人は、かく目をなむ病む。

ウ よひよひごとに、うちも寝なむ。

エ さあらむ所に、一人往なむや。

オ 「こと出で来なむず、いみじきわざかな」とおぼしたり。

問二 傍線部X「例ならで重きよし」Y「あさましき僻事」Z「すきずきしかりけること」の本文中における意味として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

X 「例ならで重きよし」

A 今までにないほど落ち込んでいること

I 以前の出来事以上に憤っていること

ウ 投獄され重罪に処せられること

E 病気になり状態が非常に悪いこと

オ 前代未聞の失敗で気後れしていること

Y 「あさましき僻事」

A あきれるほどの失態

I 浅はかに見える仕返し

ウ 前後の見境のない愚行

E おごり高ぶった悪事

オ 皆を驚かせるいたずら

Z 「すきずきしかりけること」

A 過ちに対し意固地になりすぎたこと

I 風流の道に熱心であったこと

ウ 皆が興ざめに感じてしまったこと

E 和歌の道にはそぐわなかったこと

オ 過ちに対し清廉潔白であったこと

問三 傍線部1「いみじう挑み交はして詠みけり」とあるが、長能と道済の関係の説明として最も適切なものをつぎの中から選

び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 鷹狩の歌の勝負には長能が勝ったが、以前の勝負では道済の方が優勢であった。
- イ 鷹狩の歌の勝負には道済が勝ったが、以前の勝負では長能の方が優勢であった。
- ウ 鷹狩の歌の勝負には長能が勝ったように、以前から長能の方が優勢であった。
- エ 鷹狩の歌の勝負には道済が勝ったように、以前から道済の方が優勢であった。
- オ 鷹狩の歌の勝負も互角であったように、普段から互角の勝負をくりひろげていた。
- カ 鷹狩の歌の勝負では互角であったが、以前の勝負では道済の方が優勢であった。
- キ 鷹狩の歌の勝負では互角であったが、以前の勝負では長能の方が優勢であった。

問四 傍線部2「あらは、宿借るばかりは、いかで濡れむぞ」を現代語訳し、解答欄に記せ。

問五 傍線部3「ゆゆしき過ち」とはどのようなことか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 三月は小の月であるにもかかわらず、長能が三十日まである意の歌を詠んでしまったこと。
- イ 四月から本格的に春になると思った大納言が、「春は二十九日に暮れるはずがない」と批判したこと。
- ウ まだ九日残っているにもかかわらず、長能が三月の終わりを惜しむ歌を詠んでしまったこと。
- エ 歌の中で「二十九日」が強調されていたので、大納言が春は一日で終わると解釈してしまったこと。
- オ 春は三ヶ月あるのに、長能が二十九日間しかないように誤解される歌を詠んでしまったこと。

問六 傍線部4「さばかり心に入りたりしことを、よしなく言ひて」といった大納言の心情として、最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 長能の苦しみの原因がわからないため、自身の和歌の評価が適切だったか顧みている。
- イ 長能がどれほど和歌に一途であったかを十分に理解していなかったと悔やんでいる。
- ウ 長能が二度も和歌を酷評されたことを恨みに思っていたのだとわかり、反省している。
- エ 長能の和歌の真意を手紙ではじめて知り、自分の評価が至らなかったと恥じている。
- オ 長能は和歌の失敗が原因で死んだと知ったが、その苦しみが理解できないでいる。

問七 波線部「蜻蛉の日記したる人」とは誰のことか。つぎの中から一人を選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 阿仏尼
- イ 菅原孝標女
- ウ 和泉式部
- エ 建礼門院右京大夫
- オ 藤原道綱母

つぎの問題〔四〕は、文学部を志望する受験者のみ解答せよ。

〔四〕 つぎの文章は、東晋の宰相謝安と、子敬、すなわち王献之との問答についての批評である。謝安は、博識で風流を好み、書道にも秀でた。王献之(子敬は字)は、「書聖」王羲之の子で、父とともに「二王」と称された。これを読み、後の問いに答えよ(設問の都合上、返り点、送り仮名を省いた箇所がある)。

謝安嘗問^テ子敬^フ、卿書何如^ニ右軍^ニ。答云^{ヘテ}、故当^{モトヨリ}勝^ル。安云^フ、物論^ニ殊^ニ不^レ爾^{。子敬又答^フ、時人何得^レ知^ル。敬雖^モ下^ニ權^ニ、以^テ此^ノ辞^ヲ、折^ク中^ニ安^ノ所^ヲ、鑑^ル自^ラ称^シ勝^ル父^{、不亦過^ク乎^{。且立^テ身^ヲ、揚^ル名^ヲ、事資^ス尊^ニ顯^ニ。以^テ子敬之豪^ヲ、翰^ヲ紹^シ右軍之筆^{、札雖^モ復^タ粗^ボ、伝^フ楷^ニ則^テ、美恐^レ未^ク箕裘^ニ。況^{ンヤ}乃^チ仮^ニ託^{シテ}神仙^ニ、恥^レ崇^ニ家範^ヲ。以^レ斯^ヲ成^ス学^ヲ、孰^シ愈^レ面^ニ牆^ニ。}}}}

(孫過庭「書譜」より。文章を一部改変した)

【注】

* 卿 同輩、または目下の人を呼ぶ二人称代名詞。

* 右軍 王羲之を指す。王羲之は右軍將軍だった。

* 物論 世評。

* 権 「仮」(間に合わせ、方便)に同じ。

* 豪翰 筆の意。「豪」は細毛。

* 紹 継ぐの意。

* 楷則 法則。書法。

* 箕裘 祖先伝来の家業を継ぐこと。弓作りの子は、父の作業を見て「箕」(穀物から塵やゴミをあおり出す道具)を作

り、鍛冶屋の子は、父の作業を見て「裘」(皮衣)を作ることを学ぶの意。

* 神仙 王献之は、かつて自分の書法は神仙から伝授されたと言ったことがある。

* 愈 「優」に同じ。

* 面牆 先を見通せないことのとえ。「牆」は、かきね、土塀。

問一 傍線部1「何如」、2「当勝」をひらがなのみの書き下し文にして、解答欄に記せ。

問一 傍線部3「殊不爾」の「爾」と同じ意味の「爾」を含む文をつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 爾^ハ愛^シ其^ヲ羊^ハ我^ハ愛^シ其^ヲ礼^ニ

イ 爾^ハ夜^ハ風^ハ恬^{カニ}月^ハ朗^カ

ウ 問^レ君^ニ何^ノ能^ク爾^ハ心^ヲ遠^ケ地^ヲ自^ラ偏^{ナリ}

エ 其^ハ在^リ朝^ニ廷^ニ便^{トシ}言^ヒ唯^ニ謹^ム爾^ハ

オ 唯^ニ我^ト与^レ爾^ハ有^ル是^レ夫^ト

問二 傍線部4「時人何得知」とはどういうことか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 人は時々、知ったかぶりをするということ。

イ 世間の人は、まったく分かってはいないということ。

ウ 人は、時にはすべてを知りたがるということ。

エ 当時の人々は、何でも知っていたということ。

オ 人はともすれば、間違った知識を得がちだということ。

問四 傍線部5「不亦過乎」の解釈として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア なんとまあ、ひどい勘違いだ。

イ 決して間違っていない。

ウ 無視してもよいのだろうか。

エ 通り過ぎてはいけない。

オ そんなに優秀なのか。

問五 傍線部6「実恐未克箕裘」の書き下し文は、「実に未だ箕裘を克くせざるを恐る」であるが、これに従って、解答欄の文に返り点をつけよ。

問六 傍線部7「執愈_レ面_レ牆」とあるが、作者は、どのような心情でこう述べたのか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 王猷之がでたらめなことを言うので、教え諭さなくてはならないという気持ち。

イ 王猷之が傲慢を恥じて反省したので、見直してやろうという気持ち。

ウ 王猷之は家の教えを学ぼうとしているので、励まそうという気持ち。

エ 王猷之が家の教えを蔑ろにするので、言語道断だという気持ち。

オ 王猷之は先見の明があるので、将来に期待しようという気持ち。

つぎの問題〔五〕は、経営学部・人間環境学部・G・I・S（グローバル教養学部）を志望する受験者のみ解答せよ。

〔五〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

現在のように地球がヒトやヒトの作った構造物で占められるようになったのはここ千年から数百年のことで、地球上の生命の歴史（四十億年）、さらには現在知られるほとんどの動物群の歴史（五億年）からすれば、つい「さつき」のこと、たった一呼吸前にすぎない。もしその少し前、まだ人口の希薄だった時代の地球——たとえば日本の森林——にわれわれが探検に出たとしたら、どのような印象を受けるだろうか。おそらく、「なんて昆虫が多いんだ」、「なんていろいろな昆虫がいるんだろう」と驚くに違いない。

現代は地球上に真に原生的な環境（ヒトの生活の影響を受けていない環境）というものがほとんどなくなってしまい、ヒトのもたらす環境の変化により、毎日のように多くの生物種が絶滅しているといわれている。つまり、昆虫も世界全体で減少しており、とくに街中に生活していると、昆虫と出合う機会は少なくなっている。しかし、その潜在的な多様性からすれば、実は「地球は昆虫の惑星」といっても過言ではないくらい、昆虫が隆盛をきわめているのである。

現在知られている昆虫の種数は百万種を超え、これは既知の全生物（菌類や植物、ほかの動物など）の半数以上を占める。とくに陸上環境に関しては、昆虫が圧倒的多数を占めるといってよい。しかも、百万種というのはあくまで既知の種数で、まだまだ多くの名前のない種や未発見の種が残されている。研究者によって見解が異なるが、少なくとも既知の二〜五倍の種数が実際には生息していると考えられている。

また個体数も多く、ある熱帯地域の調査では、アリだけの生物量（バイオマス）そこに住んでいる全個体を集めた重さ）で、陸上の全脊椎動物（哺乳類や両生類、爬虫類など）の生物量をはるかに凌駕することがわかっている。ちなみに日本だけでも三万数千種の昆虫が知られており、実際にはその約同数かそれ以上の未知種が残されているとされている。だから「新種発見」と

いうのは、すごいようで、それ自体あまり大したことではない。難しいのは、それが本当に新種であるかどうかを科学的に判定することである。

ではどうして昆虫が地球上で隆盛をきわめているのだろうか。

このことを語るにあたり、まず注目すべき昆虫の特徴がある。それは、「飛ぶこと」と「変態すること」である。飛べない昆虫もいるし、変態しない昆虫もいるが、それらはごく少数派で、大部分の昆虫は成虫期に飛翔し、成長の過程で変態を行う。具体的には、九九%の昆虫(なかには進化の結果として翅を失ったものもある)は飛翔を行い、八〇%以上の昆虫は「完全変態」を行う。完全変態とは、幼虫から蛹の期間を経てまったく姿の異なる成虫になることである。チョウを思い出していただくとかかりやすいだろう。

いっぽう、セミやバッタのように、幼虫が大きくなり、最後に脱皮すると翅が伸び、そのまま成虫になることを「不完全変態」という。さらに翅のない原始的な昆虫であるシミなどのように、成長にともなう性成熟以外、一切の変態を行わないことを「無変態」という。昆虫では無変態がもつとも原始的な状態で、そこから翅を持つものが進化し、さらに変態という生活史が進化していった。

人は古代から空を飛ぶことを夢見てきた。今でこそ飛行機やヘリコプターで夢の半分を叶えたが、本来、憧れの対象は鳥だったようだ。そのことはローマ神話の愛の神「クビド」が鳥の翼を着けてパタパタと飛ぶ様子を描いた絵画や、ギリシャ神話の「イーカロス」が鳥と同様の翼を作って飛ぶことに成功したといった物語にも表れている。ただし、飛翔する生物の歴史のうえで、鳥は比較的新参者である。鳥以前に翼竜が空の世界を支配していた。そして、さらにそのはるか昔、少なくとも翼竜の一億年以上前に、昆虫はすでに空を飛んでいた。つまり昆虫は、地球上最初に空に活躍の場を広げた生物なのである。

先述のとおり、飛翔可能なものが昆虫の大部分を占めることから、飛翔が昆虫の多様性に多大な影響を与えたことはまぎれもない事実である。では、具体的にどのような影響を与えたのだろうか。

その第一は、飛翔によって生活圏を広げたことである。小さな生き物が歩いて移動できる距離はたかが知れている。飛翔に

よつて、地面の水平方向の長距離移動を可能にしただけでなく、木の上、山の上など、垂直方向の移動も可能にした。この移動によるさまざまな生活環境への移動と適応が多様化の引き金となった。また、飛翔によつて天敵から容易に逃れることができるようになったり、遺伝的に離れた(近親ではない)配偶者と容易に出合えるようになったりした。

さらに、飛翔を目的として進化した翅は、色彩によつて隠蔽的な効果をもたらしたり(草のような形状のバッタの翅など)、毒であることを周りに示す警告色となつたり(毒を持つチョウのけばけばしい色の翅など)、衝撃や乾燥を避ける甲羅になつたり(甲虫の硬い翅など)して進化し、飛ぶことだけではない別の効果を与えることになつた。

次に昆虫の多様化に大きな影響を及ぼしたのは変態である。変態とは、成長の過程で姿形を変えていくこと。つまりは変身である。とくにカブトムシやチョウのように、完全変態昆虫と呼ばれるものは、その変身が著しい。卵から孵化した幼虫は、脱皮を重ねて成長し、成長も移動もしない蛹を経て、成虫となる。幼虫と成虫で姿がまったく異なるのが、完全変態昆虫の特徴である。

生物の姿形には、必ず何らかの意味がある。姿が異なるということは、多くの場合、生活の方法に違いがあるということである。つまり完全変態昆虫では、一部の例外をのぞき、幼虫と成虫では生活方法と生活場所がまったく異なるのである。

さきほど述べたように、多くの人が知っている昆虫として、チョウの生活を思い出すとわかりやすいだろう。植物に産みつけられた卵から孵化した幼虫(イモムシやケムシ)は、植物をひたすら食べて成長する。その様子は、食べるための機械のように、天敵と競争者への対処や移動以外は、ただ食べては時々休むことを繰り返すだけである。そして蛹になる。蛹のなかでは成虫に変身するために体の構造が大きく作り変えられる。

昆虫は脱皮によつて成長していくが、単純にそれだけでは体のつくりの大きな変更は難しい。そこで、蛹という「X」のような期間を経る必要があるのである。幼虫から蛹への変化も著しいが、蛹のなかでなおも変化を遂げ、成虫となつて出てくるのである。成虫は生まれた場所を離れ、花の蜜を吸つたりして、栄養を蓄えつつ、異性と出会い、交尾する。そして、雌は産卵を行う。昆虫によつては、成虫は一切餌を食はず、交尾と産卵を短期間で終えて死んでしまうものも少なく

ない。つまり成虫の基本的かつもつとも大切な役割は、繁殖行動なのである。

完全変態昆虫の生活史を要約すると、幼虫は餌を食べて大きくなるための期間、蛹は大きく変身するための期間、成虫は繁殖するための期間である。植物にたとえると、幼虫は発芽から成長の期間、成虫は花と種子の生産の期間のようなものである。

それでは、どうしてこの変態が昆虫の多様性に影響を与えたのだろうか。答は幼虫と成虫の生息環境の違いにある。幼虫と成虫が「分業」すること、そして生活環境を違えることに意味がある。幼虫は餌の豊富などところで食事に専念し、確実に成長を遂げる。そして、これは飛翔能力の獲得とも関係するが、成虫になって、別の場所に(多くの場合、飛んで)分散し、近親者のいない場所や、ほかのよりよい生息環境に産卵する。もしこれまでと違う生活環境に適応できれば、それは新たな種の誕生につながる。

反対に、変態をしないとどうなるだろうか。昆虫のなかで飛ぶ進化を遂げていないのは、原始的な昆虫であり、変態を行わないシミ目やイシノミ目のなかまである。これらは移動分散に乏しく、幼虫と成虫が同じところに暮らし、生活環境も比較的単調である。そのため、どの種も似たような姿をしており、種数も少ない。これらの事実を、飛翔や変態が昆虫の多様性に与える影響の大きさを如実に表している。

現在の生物多様性は、さまざまな環境への分散と「適応」が繰り返され、気の遠くなるような長い期間を経て成立したものである。適応とは、新しい環境に住めるようになったり、別の餌を食べることができるようになったりすることであるが、それは「進化」という現象の一つのかたちである。

(丸山宗利「昆虫はすごい」より。文章を一部改変した)

問一 傍線部「地球は昆虫の惑星」といっても過言ではない」とあるが、どうしてそう言えるのか。その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 昆虫の種類は全生物の種類を半数を超え、とくに地上においては圧倒的な多数派であり、実質的に地球を占有していると考えてよいから。

イ 昆虫は既知の種類が多いうえに、個体数でも一般に地球を支配していると見なされる脊椎動物を大きく上回る、という事実が確認されているから。

ウ 昆虫にはまだ未知の種類が数多く残されており、多くの生物種が減びつつある現在、地球の未来はそれらの昆虫の可塑性にかかっているとと言えるから。

エ 生命の歴史では、人類が地球を支配するようになった期間はごくわずかだが、最初に空を飛ぶ生物となった昆虫はその歴史の大部分を支配してきたと認められるから。

オ 既知の種類に加えてさらに多くの未知の種類が存在していることが予想され、地球に生息している生物ではもつとも栄えている種だと言えるから。

問二 傍線部2「昆虫では無変態がもつとも原始的な状態で、そこから翅を持つものが進化し、さらに変態という生活史が進化していった」とあるが、筆者の考える「進化」について述べたものとして最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 進化とは成長の過程で姿形を変えることであり、そのことによって生物は天敵から逃れやすくなったり、遺伝的に離れた配偶者と遭遇できるようになったりしてきた。

イ 昆虫の次に翼竜が空を飛び、その次に鳥が出現し、鳥になろうとした人類が空を飛ぶ機械を作り出したように、進化の大部分は空を飛ぶ生物によってもたらされてきた。

ウ 多くの昆虫が次々と翅をもつものに変わっていったのは、飛翔する昆虫だけが広大な生活圏を手に入れて繁殖できたためであり、いわば繁殖する力が全生物の進化を促した。

エ さまざまな環境に分散した生物が新しい場所に住めるようになったり、別の餌を食べられるようになったりすること、進化の一つであり、それは生物の多様性を実現してきた。

オ 昆虫では飛翔するための翅が姿を隠す道具になったり、危険を示したり身体を守ったりする役割を獲得してきたが、そうして生物は思いがけない機能を手に入れることで進化してきた。

問三 空欄 X に入る語句として、最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 体の構造の改造工場

イ 生活環境のビッグバン

ウ 飛翔のための準備体操

エ 適応のための休憩時間

オ 繁殖行動の心の準備

問四 傍線部3「どうしてこの変態が昆虫の多様性に影響を与えたのだろうか」とあるが、それを説明したものとして最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 昆虫は変態によつて体の構造を劇的に変えることができるが、その変化の能力はそのまま多様な種が生まれる無限の可能性を意味しているから。

イ 変態によつて、成長する期間と繁殖する期間で生きる場所を変えられる昆虫は、様々な場所に分散し違った環境に適応して異なる種を生む可能性をもっているから。

ウ 飛翔によつて生活環境を変えられる昆虫の能力は、体のつくりを大きく変更することで獲得されるため、完全変態昆虫のみが多様化を生み出すことができると言えるから。

エ 不完全変態でも完全変態でも、変態を行う昆虫の幼虫は成虫とは異なる安全な環境で生活できるが、それは新たな種が生まれたときに生存する確率を高めるから。

オ 完全変態を行う昆虫の成虫は、移動せずに十分な活力を蓄えられる蛹の期間を経ていることによつて、多くの子孫を生み出す繁殖行動に専念できるから。

問五 本文の内容に合致するものをつぎの中から二つを選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 街中で昆虫をあまり見かけなくなったという変化は、生物の歴史で考えればごく最近の出来事であり、地球が人間の構造物で覆われるようになった現在も、実は昆虫の数は減っていない。

イ すでに百万種以上が発見されている昆虫では、新種発見はそれほど簡単なことではないが、それ以上に難しいのは、新種の昆虫が既知の膨大な種と違うものだと科学的に証明することである。

ウ 空を飛ぶために進化した昆虫の翅は、天敵から逃れたり近親ではない配偶者と出合ったりする能力のほか、に色彩や身を守る機能によって、飛ぶこと以外の効果で昆虫の多様性を実現している。

エ 無変態の昆虫も、不完全変態の昆虫も、完全変態の昆虫も、それぞれ生物としてその姿形には必然性と意味があり、その区別が昆虫の多様性を生み出す力をもたらしている。

オ 変化も移動もしない蛹という危険な時期はあるが、安全な場所で成長する幼虫から、翅を得て自由に天敵から逃れられる成虫へと変化する完全変態昆虫は、もともと進化した昆虫である。

カ 変態をしない昆虫は、飛翔する能力をもたない原始的な昆虫でもあり、それらはあまり移動せず生活する場所も変わらないので、たがいに姿が似ていて種としての多様性を獲得しにくい。

問六 波線部「どうして昆虫が地球上で隆盛をきわめているのだろうか」とあるが、本文全体の内容を踏まえ、その問いに対する筆者の考えを四十字以上五十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

